

第2回 特色あり県立高校づくり懇談会（8月9日開催）

長野県松本蟻ヶ崎高校 鳥谷越 浩子

■生徒の希望に基づき学科の定員を決めることについて

現在の普：職：総=7：2：1について、生徒の希望割合からも、問題と感じていなかった。中学校までの体験やキャリア教育を経て自分のその先の人生を想像し、これから先の社会でどう生きていきたいかを、中学生という発達段階で確立するのは難しい。そこまでの成長過程で描いた夢を持ち高校へ入学しても、「自分のやりたかったことではなかった」となる場合も耳にする。自分自身を見つめ、問いと向き合って社会参画を考えながら自分の在り方を考えるという力がつくのが「高校での学びや経験」であれば、「自分のやりたかったこと」と目指して入学した学科が、そうではなかったとしても、自分自身の特性・興味関心・将来につながる仕事であるのかを自分自身で見極められる力がついたと考えれば、それも「高校で学ぶこと」の意味であるのではと考える

■職業科で学んだ生徒が、その専門以外の進路を選んでいることについて

例えば、私は音楽大学という単科大学を卒業しているが、卒業生は全員音楽関係の仕事についているということはない。むしろ、音楽関係の仕事についている割合の方が低い。

高校においても、進学校に入学し就職する生徒もいれば、「その他」という卒業後の進路をあえて選択する生徒もいる。

高校の職業科を卒業し同じ方面の進路を選択する生徒は1割程度であろうか。現場の職員としてそれを「ミスマッチ」とは感じない。時代は恐ろしい早さで変化しており、その時の流行トレンドや、求められる「科」を、例えば学科改変をして募集をかけても、とても変化に追いつかないであろうし、教える側の教員確保問題はどうかであろうか。

P5 右側「出口」の、「産業界の声」を見ると、業界別の高校生に期待する声は、「どの科にも共通している」ことがわかる。探究心、やる気、向上心、コミユカ・・・。

例えば商業科の生徒が、進路先として「【商業】という方面に進出しやすい現状」はあるであろう。これは、産業界の大きなご支援、デュアルシステム、インターンシップといった連携の賜物である。逆に普通科を卒業した生徒も農業、工業等の職業選択をする場合の、その「職業人材」をどう作っていくかが社会全体の課題ではないであろうか。

多様性を重視するこれからの社会においては、違う方面の進路選択は生徒たちが自身と向き合った結果の「進化」という魅力とも考える。職業科での学びが、産業界が期待する「向上心、探究心、人間力」を培えるものであれば、出口の統一化がはかられなくとも、社会全体への入り口として人材育成にはつながっていると考える。

また一方で、中学生の7割が進路先に選んでいる「普通科高校」でも、多様な学びを展開している。生徒の実情に沿ったコース制、取り出しの授業や、キャリア教育としてインターンシップの実施など、それぞれの学校が工夫し多様な学びを展開している実情もある。

高校の出口は社会への入り口でもある。いずれそのループが、めぐりめぐって、職業科卒業、普通科卒業、専科卒業等の枠を超えて、お互いを補い合い支え合い学び合う世の中になれば良いと感じる。産業界様のご意見やご要望をぜひお聞きしたい